

P3-39-11 自然妊娠経膣分娩後産褥期に急性増悪した Hyperreactio luteinalis の一例

防衛医大

中司匡哉, 笹 秀典, 宮本守員, 澁谷剛志, 石橋弘樹, 岩橋秀樹, 加藤顕人, 大下珠緒, 羽田 平

【緒言】Hyperreactio luteinalis(以下 HL)は、両側卵巣の多房性腫大と β hCG の上昇を特徴とした稀な良性疾患である。Ovarian Hyperstimulation Syndrome(以下 OHSS)は不妊症治療の排卵誘発に伴う HL の疾患概念の一部という報告もある。今回我々は産褥期に急性増悪した HL と考えられる症例を経験したので報告する。【症例】28 歳, 0 経妊 0 経産。自然妊娠。初期超音波では付属器異常の指摘なし。妊娠 27 週より切迫早産のため管理入院とし、妊娠 35 週に経膣分娩となった。産褥 1 日の造影 CT で両側卵巣の多房性腫大(右最大径 8cm, 左最大径 6cm)を認め、HL が疑われた。腹水は認めなかった。産褥 2 日より腹部膨満、嘔吐、下痢が出現。産褥 3 日に D-ダイマー、FDP の高値を認めたため再度造影 CT を行った。明らかな血栓を認めなかったが、両側卵巣の多房性腫大に加え、上腹部に及ぶ腹水と著明な腸管浮腫を認めた。発症後のエストラジオールは 9590pg/ml と上昇していた。分娩直前の血清 hCG 値が 49 万 mIU/mL と高値を示していた。画像検索では明らかな hCG 産生腫瘍を認めなかった。低蛋白血症を認めたため蛋白補充や抗凝固療法などの保存的加療により、臨床症状の軽快を認めた。【考察】産褥期に HL を認めた症例は報告されている。しかし、産褥期に急性増悪を伴う HL の報告例は少数である。産褥期に消化器症状を認めた場合は HL や OHSS を鑑別に含めた迅速な精査、対応が必要である。

P3-39-12 妊娠中に発症した付属器茎捻転症例の臨床的特徴の検討

市立広島市民病院

森川恵司, 岡部倫子, 植田麻衣子, 関野 和, 舩本佳代, 小松玲奈, 依光正枝, 上野尚子, 中西美恵, 石田 理, 野間 純, 児玉順一

【目的】付属器茎捻転は迅速な外科的対応が必要となる産婦人科救急疾患のひとつであるが、妊娠中に茎捻転をきたす頻度は約 1000 分娩に 1 例と報告され稀である。当科で経験した妊娠中の付属器茎捻転症例の臨床的特徴を検討することを目的とした。【方法】2007 年 3 月から 2015 年 9 月に当科で手術を施行し付属器茎捻転と診断した症例のうち妊娠中の症例を対象とし、非妊娠症例と比較検討した。妊娠週数、腫瘍組織型、腫瘍最大径、手術方法、周産期予後、生殖補助医療の有無等につき後方視的に検討を行った。【成績】113 例中、15 例(13.3%)が妊娠中症例であった。妊娠週数の中央値は 13 (6-36) 週で、妊娠初期および末期に多い傾向であった。腫瘍組織型は成熟嚢胞性奇形腫 5 例(33.3%)、OHSS 3 例(20.0%)、ルテイン嚢胞 2 例(13.3%)、漿液性嚢胞腺腫 1 例(6.7%)で、出血や壊死により評価困難なものを 4 例(26.7%)に認めた。手術術式では卵巣温存手術が 9 例(60%)、卵巣切除症例が 6 例(40%)と卵巣温存が可能な割合が高かった。非妊娠症例の腫瘍組織型は成熟嚢胞性奇形腫 46 例(46.9%)、粘液性嚢胞腺腫 13 例(13.2%)、漿液性嚢胞腺腫 9 例(9.2%)と続き、評価困難を 10 例(10.2%)に認めた。【結論】非妊娠症例と比較し OHSS、ルテイン嚢胞などの妊娠中に増大したと考えられる非腫瘍性症例の割合が多かった。また壊死・出血による組織評価困難の割合が高く、妊娠中のための手術対応の遅れに起因することが予想され、迅速かつ正確な診断が必要と考えられた。

P3-40-1 妊娠中の歯科治療が妊娠分娩転帰に及ぼす影響

熊本大¹, 熊本赤十字病院²値賀さくら¹, 大場 隆¹, 三好潤也², 片瀬秀隆¹

【目的】当県で実施した早産予防対策事業の一環として、妊娠中の歯科治療が妊娠分娩転帰に及ぼす効果を検討した。【方法】2012 年 8 月から 2014 年 1 月に当県で周産期管理を受けた妊婦を対象に、妊娠の前半期及び後半期の歯周状態を評価した。歯科治療は歯科医が必要と判断し、妊婦本人が同意した場合に行った。妊娠分娩転帰は、分娩を取り扱った産科医療機関が報告した。本研究は当施設の倫理委員会の承認を得て行った。【成績】対象妊婦は 20,701 名で、歯科健診は妊娠前半期に 9,527 名、後半期に 2,542 名が受診し、前半期の歯科健診で 3,016 名(32.2%)が歯周病と診断された。1 回目の健診時に歯科治療を受けた 689 名では歯周病妊婦の割合が 55.1% から 45.1% へ減少した。歯科健診を受診し、かつ妊娠分娩転帰が報告された 3,224 名のうち、歯周病の妊婦は 1,634 名(50.7%)で、このうち歯科治療を受けた妊婦は 729 名(22.6%)だった。歯周病のない群、歯周病に対して治療を行った群、治療を行わなかった群で比較すると妊娠糖尿病及び糖尿病合併妊娠発症率は、歯周病のない群で有意に低かったが(1.8% vs 2.3% vs 3.4%, $p=0.038$)、早産率(4.6% vs 4.1% vs 4.5%)、妊娠高血圧症候群発症率(1.8% vs 2.1% vs 2.2%)、低出生体重児出生率(8.6% vs 6.3% vs 7.3%)には有意な差はなかった。【結論】妊婦の歯周病は妊娠糖尿病及び糖尿病合併妊娠と関連していた。妊娠中の歯科治療は歯周状態を改善させるが、妊娠分娩転帰には影響しなかった。